

ISO 15189 取得を契機とした輸血教育の取り組み

◎吉丸 希歩¹⁾、吉田 雅弥¹⁾、平木 幹久¹⁾、西山 陽香¹⁾、福岡 星夜¹⁾、内田 有咲¹⁾、山崎 卓¹⁾
熊本赤十字病院¹⁾

【はじめに】当院は病床数 490 床を有する 3 次救急病院である。時間外においては、輸血専任以外の技師も輸血業務に携わっている。これまで時間外勤務者の精神的負担軽減のため、実践的なトレーニングを含んだ教育を行ってきたが、ISO15189 取得を機に、輸血教育の見直しを図ったため、その取り組みについて報告する。

【運用】輸血専任技師及び時間外に輸血検査を担当する技師を対象とし、内部精度管理における技師間差確認を目的に 4 回/年の頻度で実施。内容は、部分凝集の判定を含む血液型検査や直接抗グロブリン試験等の実技問題と写真を用いた凝集反応分類などの机上問題を組み合わせで行っている。実施毎に合格ラインを設定し、合格ラインに達しなかった技師については、再教育を実施。精度管理委員会にて実施内容を報告・フィードバックし、記録に残す運用とした。

【考察】現在までに、実技問題 5 回と机上問題 7 回を実施し、標準化を図っている。実技問題では、部分凝集の見逃しが多かったため、時期を空け再度実施したところ、

再教育となった技師数が減少した。また、当院では全自動輸血検査装置にて検査を実施し、異常反応が起きた際には試験管法にて再検査を行う運用としている。カラム凝集法を正しく理解していなければ、やみくもに試験管法を実施しても誤判定につながる恐れがあるため、机上問題の一部として、カラム凝集法の問題や問い合わせの多い内容など、知識を問う問題を出題し、内容の充実を図っている。机上問題は、コロナ禍でも実施しやすく、技師間差を減少させる教育のツールとして今後も使用していきたいと考えている。

【まとめ】ISO15189 における内部精度管理の一環として、技師間差確認・標準化を図る運用を構築した。凝集反応分類などの目合わせはもちろん必要であるが、それらに付随し、様々な視点から問題を出題することで、より安全な輸血療法の実施に貢献できると思われる。

連絡先：096-384-2111(内線 6371)